

4. まとめ

(1) 「子どもから学ぶ」視点

前年度、小学部では「学ぶ力」を育むために、子どもとの「心のふれあい」「笑顔」を大切にした教育実践に取り組んだ。そこではいろいろな教師の支援について共通理解できた。そして、支援の最も基盤となるのは「子どもから学ぶ」という教師の姿勢であることも確認できた。わかりきったことではあるが、しかし本当にその当然のことをきちんと行っているかどうか、あらためて教師自身が自分を振り返りながら試行錯誤する機会になったといえる。

今年度は、「わかる」ということに視点をあてて学校研究に取り組むことになり、まず小学部の子どもたちにとっての「わかる」とはどのようなことであるかを十分に話し合うところから学部研究がスタートした。様々な思いを出し合い検討していく中で、「わかる」に迫るためには何よりも「子どもを知ること」つまり教師自身が「子どもをわかる」ことが大切であるという点で認識が一致した。子どもをよりわかるために、子どもが教えてくれていることをキャッチできる敏感なアンテナを張り、その気づきを実践に活かしていこうという姿勢は、研究テーマが変わったとはいえ昨年までの学部の実践に連なるものである。そして今年度はその実践の場面を、「わかり合う」ための基本となる「コミュニケーション」に絞って取り組むことにしたのである。

(2) 取り組みのアプローチ

「コミュニケーション」といってもその手立てや内容はいろいろである。そこで子どもたち一人一人の「わかる」に迫るために、まず個々の子どもに焦点をあててみていくことにした。そのアプローチの仕方は、たとえば以下のように様々であった。

- ・日常生活の中で子ども自身が最も思いを伝えたい必要に迫られる場面から取り組む
- ・学校生活において子どもと向き合う頻度が多い場面を利用してかかわりを深める
- ・今後の生活を考える上でこれを使えれば本人にとって有利になるのではと思われる伝達手段を試みる
- ・子ども自身が興味を見いだした伝達手段の活用を図る
- ・家庭における子どもの様子にヒントを得て学校でも手立てを講じてかかわっていく
- ・家庭における子育ての悩みを共有し、子どもの姿や接し方を伝え合うことで家族の方の子どもへの意識に働きかけていく

これらの視点をきっかけとして実践をスタートさせた。取り組んでいく中で、指導の場面や対象、支援の方法などについてその幅を絞ったり拡げていったりした。



写真①

「私の思いが伝わったよ！」(写真①)

要求があるときは、教師の腕を引いたり肩を叩いたりして伝えてくるSさん。大好きな砂場へ行きたいときに、教師に砂場の写真を提示しながら言葉でも言うことを繰り返してきた。そのうち写真なしでも自ら「すなば」と言って伝えられるようになってきたよ。



写真②

「婆あば、(月だよ) ポンポコポン！」(写真②)

家でお母さんの「だめ」をまねて「あめ」と言えたMさん。学校でもマイクを向けると「アー」という返事が出るようになってきた。表現会の劇では「バーバ」「ポンポコ」とセリフがしっかり言えたよ。その後、音楽の時間にも曲に合わせて「バーバ、バーバ」とマイクを手にも歌う姿も見られたね。

(3) 研究を振り返って

コミュニケーションをとり合うということは日常的に行っていることであり、そのことが苦手な子どもたちとかかわっていく中では、適当と考えられる配慮や工夫はこれまでもそれぞれなされてきている。しかし、今回、学部の研究としてじっくり取り組んだことで得たことや再確認できたことは多い。校内の環境を見直し整備していく中では、子どもの視点で教材教具や掲示などを捉えていく大切さをあらためて確認できた。これはコミュニケーション面のみならず、授業作りにも通じる根本的な点である。また、支援という点では、教師全員が子ども一人一人のことを共通理解してかかわっていくことができた。そのことで特定の指導場面での子どもへの対応の一貫性が保てたり、自由遊びの場面でも子どもと楽しむ幅が広がったりした。また、個々の子どものことについて皆で検討すれば、いろいろな見方、考え方ができる。一人の子への取り組みが他の子に対する支援のヒントになる利点もあった。実践を重ねていく中で子どもの「わかる」「わかってうれしい」姿がみえることはとても嬉しく、励みにもなった。

子どもに応じていろいろな視点、角度から実践を積み重ねてきたが、その全てが順調な成果を得られたわけではもちろんない。教材を工夫したり配慮した支援を試みてもあまり手応えが得られなかったことも多い。この支援がこの子にとって本当に適しているのか、このまま指導を継続していてもよいのかどうか、別の手立てがないか、教師主導の一方的な願いがまさっていないか、教材や道具の導入が優先されてはいないかなどということについて悩みつつ話し合ってきた。見直す点があれば修正し試行してみた。研究の積み重ねが浅いためであろうが、子どもたちに対して試みている伝達手段が日常生活の中に般化し、子ども自身のもので根付いていくことを願いつつ、そのための支援の難しさを常に感じさせられている。実践の期間が短いことで子どもの変容がみえにくい例は今後も指

導を継続していきたい。

(4) コミュニケーション支援において大切にしたいこと

言葉でのコミュニケーションが難しい子どもが増えてきたという本学部の実態を踏まえると、わかり合うための環境整備や手立ての工夫は当然心がけなければならないことである。そのために教師は自分の五感を総動員して取り組んできた。そしてこれまでの「わかり合う」ための実践から得たものの一つは、「子どもたちとの暖かい心のふれあい」こそがその基盤として欠かせないということである。親しい友だちや大人との安心できる心地よい関係や、好奇心をそそられる楽しい活動の中で、子どもの笑い声や嬉しい声がたくさん聞かれることが、コミュニケーションが育つ土台ではないだろうか。コミュニケーションの支援といえば、つい要求などを伝達するという側面に視点が偏りがちだが、周りの人と気持ちや雰囲気共有するという経験もまた、忘れてはならない大切な点である。そのふれあいの積み重ねがあってこそ、子どもの「伝えたい」「わかってほしい」という思い「わからない」というとまどいや不安をくみ取れるように教師が育っていくのだろう。

一人一人の子どもについてみていきながら、一方で私たちは集団が個を育む力をもっていることも大事に考えている。そのため、子どもたちが目を輝かせて飛びついてくれるような魅力ある学習活動の充実も心がけてきた。その中で個別の実践で得られた成果も取り入れ、子どもたちの「わかる」状況を増やしていきたいと願って取り組んできた。

研究の過程で得られたことの最も大きい点は、教師の意識である。自分自身をわかり、これまでよりさらに子どもの目線に近づき、「わかる」に迫ろうという姿勢は今後もさらに深めていきたい。「子どもをわかる」ことは教師が「かわる」ことといってもよいのではないだろうか。

(5) 終わりに

コミュニケーションの指導については、私たちの取り組みは遅々としており、課題もいろいろある。学ばなければならないことはまだまだ多い。子どもたちが見せてくれるささやかな、しかし確実な成長に感動し、またそっぽを向かれたことには謙虚に反省しながら、今後も保護者との連携を大事にして、「わかる」「わかり合う」という生活の基盤のバリアフリーをめざし、さらに研究を深めていきたい。

「子どもと視線が合うことが増えてきました。視線が合うって愛らしいことですね！」というある保護者の言葉が、今、胸に熱く響いている。

(神谷 みつ江)



写真③

「♪こーこは 母ちゃんにんどころ」(写真③)

手遊び歌「にんどころ」がお気に入りのNさん。先生と向かい合って期待感いっぱい！顔を指でさわられて嬉しいやらくすぐったいやら。最後のコチョコチョコくすぐりで笑顔満開ね！

【参考文献】

- 1) 山鳥 重 「わかる」ということはどういうことか ちくま書房
- 2) 村越 愛策 サインとマーク フレーベル館
- 3) 大石 敬子 ことばの障害と評価と指導 大修館書店
- 4) 坂井 聡 自閉症や知的障害をもつ人との
コミュニケーションのための10のアイデア エンパワメント研究所
- 5) 坂井 聡 クラスルーム・コミュニケーション こころリソースブック出版会
- 6) 秦野 悦子 やまだようこ
コミュニケーションという謎 ミネルヴァ書房
- 7) 長崎 勤 小野里美帆
コミュニケーションの発達と指導プログラム 日本文化科学社
- 8) 飯高 京子 若林 陽子 長崎 勤
ことばの発達の障害とその指導 学苑社